博　士　学　位　論　文

― 論文要旨および審査結果の要旨 ―

第　10　号

武 蔵 野 音 楽 大 学

はしがき

本編は学位規則 (平成 25 年文部科学省令第 5 号) 第 8 条による公表を目的として、平成 27 年度本学において博士 (音楽学) の学位を授与した者の論文の要旨および論文審査の結果の要旨を収録したものである。

目　　次

学位記番号	学位の種類	氏　名	論文題目	頁
博甲第 18 号	博士 (音楽学)	秋 津　　緑	1783 年 - 1791 年にブルク劇場で初演されたオペラにおける創唱歌手の貢献	1

氏　　名	秋津　緑（あきつ　みどり）
学位の種類	博士 (音楽学)
学位記番号	博甲第 18 号
学位授与日	平成 28 年 5 月 26 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項
学位論文題目	1783 年 - 1791 年にブルク劇場で初演されたオペラにおける創唱歌手の貢献
論文審査委員	主査　教　授　寺　本　まり子
	副査　教　授　薦　田　治　子
	副査　教　授　楢　崎　洋　子
	副査　講　師　米　田　かおり
	副査　　土　田　英三郎 (東京藝術大学教授)

論　文　要　旨

本研究は、1783 年から 1791 年にかけてブルク劇場で活躍した歌手を考察対象として、オペラにおける創唱歌手、すなわち初演を歌った歌手に着目する。そして、作曲家が歌手のために作曲したことを「宛て書き」と考え、彼らに「宛て書き」された楽曲を考察し、創唱歌手のオペラにおける貢献を明らかにすることを研究の目的とする。

オペラにおける創唱歌手への研究は、近年注目されはじめた。しかし、これまで研究されてきたのは、多くの場合オペラ・セリアに出演した歌手であった。先行研究では、歌手の存在が注目されて代表的な歌手の経歴がまとめられてはいるが、作曲家が歌手に配慮して作曲したことは当然と考えられ、具体的な研究は進んでいない。一方オペラ・ブッファは、オペラ・セリアよりも芸術性が低く捉えられ、これは出演歌手に対しても同様である。ようやく Link 2000 をはじめとする研究によって、このジャンルが見直され始めたと言えよう。しかし、これらの研究では、独唱曲しか考察されていない。オペラにおいて、歌手は独唱曲よりもフィナーレを含む重唱曲を多く歌う。そして、これらの重唱曲にはソロ部分が含まれているため、重唱曲の考察をしなければ「宛て書き」の特徴は捉えられないと考えられるので、本研究では重唱曲も考察した。

ウィーンのブルク劇場では、皇帝ヨーゼフ II 世の政策転換によって、1783 年からオペラ・ブッファのみが上演されていく。この転換により、ソプラノ歌手のストーラス Nancy Storace やバス歌手ベヌッチ Francesco Benucci 等の優れた歌手がヨーロッパ各地から集められ、作曲家サリエリ Antonio Salieri やモーツァルト Wolfgang Amadeus Mozart らに

よって、次々に新作オペラが生み出された。こうしたブルク劇場に対する宮廷の政策は、結果的にオペラ・ブッファの芸術性を高める契機となった。当時のオペラ・ブッファでは、オペラ・セリアとオペラ・ブッファの相互浸透が著しく、オペラ・セリアに登場する役柄「セリア役」とオペラ・ブッファに登場する役柄「ブッファ役」が 1 つの作品の中で共存した。

ソプラノでは、「ブッファ役」と「セリア役」の均衡をいかに保つかが重要となった。フェッラレーゼ Adriana Ferrarese はオペラ・セリアの舞台で手にしていたプリマ・ドンナの位置をオペラ・ブッファの中でも保ち、「セリア役」として舞台に立ち続けた。彼女に「宛て書き」された楽曲は、オペラ・セリアと同じような大規模なアリアであり、広い音域や華美な装飾が含まれていた。物語の展開を逸脱する程の過度な要求は、オペラ・ブッファの芸術性の向上に期待された要素が、彼女 1 人に任されていた為である。

一方、この「セリア役」と対等な位置まで重要度が引き上げられたのは、「ブッファ役」であった。ストーラスに「宛て書き」された楽曲は、前述のフェッラレーゼとは異なった高度な歌唱法が要求されていた。また、重唱曲には独自の点が多く、「セリア役」と違った面でこの役柄が目立たされていることも重要である。こうして同じ声種でも対照的なタイプの歌手に賢明な「宛て書き」が行われた結果、ソプラノと言う声種の枠組みを大いに広げると共に、オペラ・ブッファの中で欠かすことの出来ない、全く異なった立場の女性登場人物の共存を実現させたのである。

カストラートが独占していたプリモ・ウオーモの位置を獲得する為に、テノールには高音域と装飾的要素が要求された。時代が進むにつれて、テノールの楽曲において高音域の重要性が高まってくるのは、この音域を得意としたカルヴェージ Vincenzo Calvesi が独占的にブルク劇場の新作オペラに出演し続けていたことからも明らかである。さらに、彼に「宛て書き」された楽曲は、独唱曲だけでなく重唱曲にも装飾的要素が盛り込まれていた。プリマ・ドンナに比肩する程の彼の歌唱力によって、テノールはカストラートに譲っていた位置を取り戻し、プリモ・ウオーモにまで引き上げられたのである。

オペラでは、高音域の声種ばかりに関心が寄せられていたため、バスはジャンルを問わず 18 世紀後半までその存在が軽視されてきた。ソプラノと同じくバスにおける「ブッファ役」も軽視されていたが、ベヌッチへ「宛て書き」された楽曲を考察すると、「セリア役」の要素が旋律に取り入れられていることが注目される。特に、幅の広い跳躍の繰り返しや、フェルマータでの自由装飾は、ベヌッチの技量に合わせて加えられた。それによって、登場人物に多面性が与えられ、18 世紀末の絶対的な地位の獲得に繋がる。

以上のことから、従来の研究では軽視されていたオペラ・ブッファの「ブッファ役」は、「セリア役」を歌う歌手に比肩する歌唱力によってオペラ・ブッファとオペラ・セリアの両要素の均衡を保ち、相互浸透を実現させたと言えよう。両要素が結び付けられたことで、オペラ・ブッファはより複雑な内容を持ち、登場人物の性格には多面性が与えられた。創唱歌手が、各声種の枠組みを広げることに貢献したのである。

論文審査結果の要旨

本論文は、ヨーゼフ 2 世のオペラ政策の反映として 1783 年から 1791 年にかけてブルク劇場で初演されたオペラにおいて、特定の歌手のために「宛て書き」された楽曲を通して、初演で歌った創唱歌手のオペラにおける貢献を明らかにすることを研究の目的としている。この研究の特色は、オペラ史において作曲者を中心に考えるのではなく、特定の歌い手に着目し、彼らの歌唱能力が創作に及ぼした影響を切り口にしている点である。近年の新しい演奏史的な問題意識とオペラの創作史・様式史という伝統的な手法が交錯するところに問題が設定されている点が、非常に高く評価できる。歴史上の歌手に関する本格的な研究は、ようやく 1990 年代に経歴を明らかにすることから始まったが、対象曲がオペラの独唱曲に限定されていたり、セリア歌手のみに注目してブッファ歌手を軽視する傾向にあった。本論文は、それら先行研究の成果に立脚しながらも、創唱歌手の影響を楽譜からより具体的に分析し、オペラを構成する不可欠の要素である重唱やフィナーレにも着目し、さらにオペラ・ブッファにおける「セリア役」と「ブッファ役」の双方に目を向けていることが、従来にない新しい点と言えよう。

結論として、ブッファ役がセリア役に比肩する歌唱力を持っていたと考えられること、そのことによってオペラ・ブッファにおいてブッファとセリアの両要素が均衡を保ち、相互浸透が実現されたこと、そのためオペラ・ブッファはより複雑な内容を持つようになり、登場人物の性格に多面性が与えられるようになったこと、創唱歌手たちがそうした各声種の枠組みを広げることに貢献したことが指摘された。また、本審査論文では予備審査論文の誤字・脱字がかなり訂正され、日本語訳も再検討された点は評価できる。

本論文はこのように優れた面をもつものの、一方では楽譜以外の当時の言説やドキュメント、書簡、日記、新聞雑誌の記事といった一次資料への検証が不十分である点は否めず、一次資料に立脚した、信頼度の高い先行研究の成果が十分に生かされていない箇所が見られることは惜しまれる。さらに、当時のウィーンの 2 大劇場であるブルク劇場とケルントナートーア劇場の絡みをよりいっそう明確に記し、演目一覧表を添えることが出来れば理解が深まったであろう。また、曲の分析にあたっては、声楽家としての経験を生かす工夫がなされることが望まれる。以上のような改善すべき点はあるものの、モーツァルトをはじめとするこの時期のブッファ作品に対する歴史的・批判的解釈を広げ、深めるためのひとつの方向性を提示することが出来たのはポジティヴな成果であり、本論文は課程博士の称号を授与するに値する水準には充分達していると判断できる。

博士学位論文　　論文要旨および審査結果の要旨 (第 10 号)

平成 28 年 8 月 5 日発行

発　行　　武蔵野音楽大学大学院

編　集　　武蔵野音楽大学学務部

〒176-8521　東京都練馬区羽沢 1-13-1

電話　03-3992-1128